

私の人生

滋賀県 海老名 庄 六

住所 滋賀県蒲生郡武佐村大字友定二百六十番地。大正十四年七月二十五日 同住所にて生まれる。

昭和七年四月一日 村立武佐尋常高等小学校に入学する。

昭和十三年三月二十日 六年生卒業、

昭和十三年四月一日 武佐高等小学校に入学。

昭和十五年三月二十日 武佐高等小学校卒業、同年四月武佐青年学校に入学、その間農業に従事する。

家族は父、母、姉二人、小生との五人家族です。徴兵検査は繰上げて昭和十九年五月八幡小学校において受検する。当時十九歳である。甲種合格となった。

昭和十九年九月に召集令状の通知を受ける。

昭和十九年十一月二十日に大阪歩兵第八連隊補充隊に入隊した。同時に軍服、帽子、長靴の支給、次に銃

は北支一九式の短銃であり、弾は三八歩式弾であった。そのとき銃と弾が違った。剣は短剣で鞘は竹であった。飯盒は竹籠である。十一月二十五日夜補充隊を出発、大阪より九州博多駅到着。博多港より朝鮮釜山に上陸した後、汽車にて平壤―新義州―瀋陽―北京―天津―濟南―徐州。濟南より徐州のその間に襲撃にて鉄道破壊を受けて少年兵一同下車して攻撃に当たったが銃と弾とが違い間に合わなかった。指揮者の班長さんは拳銃によって攻撃した。一時待機、復旧後出発、次は開封―歸徳に到着。歸徳より自動車にて河南省の洛陽に到着した。

昭和十九年十一月三十日騎兵第二十五連隊北支派遣軍騎兵五三五二部隊第一中隊に入隊する。同時騎兵銃、軍力、サーベル剣、拳銃を支給された。

翌日は二名に一頭の馬を与えられ交互に乗り、一名は轡を持って歩き乗馬の訓練をする。三日目より一人に一頭の馬が与えられて、毎日毎日乗馬訓練と襲撃訓練を行う。また、片手軍刀術練習、乗馬にて片手で人形を刺す訓練ばかりである。週に一回は馬屋当番が当

たる。十数頭の馬の尻かえをする水と餌与する水は、きらすことができないので大変であった。月に三回ないし四回は麦乾を徴発に支那人を連れて行く。

昭和二十年二月末に第一期の検閲が終わってから重慶作戦に参加の途中、三月中旬ごろ少年兵数名は、鉄道警備隊として開封に戻り、開封駅から帰徳駅まで毎日二回の警備を行う。時々P50戦闘機が機関車を襲撃することがあり、そのため狙われないため機関車の防壁を支那人を使い壁土にて六メートルくらいの土塀を作り、空襲時には機関車を土塀に格納することが幾度ありました。五月中旬ごろ我々は沖縄要員かもわかないが、移転せねばならないとのことで鉄道隊を出発した。

ところが沖縄には行けないため、満州でストップした。六月に満州関東軍第一一七師団工兵隊の第二中隊に転属しました。満州国龍江省洮南である。その後工兵の訓練に取り組み船で櫓を漕ぐ訓練あるいは穴掘り訓練の毎日であり、二カ月ほど繰り返してありました。八月八日夜、ソ連軍が侵入するから、戦車が落ちる

ように幅二メートルの戦車壕を掘るように命令があり、夜通しにて壕掘りしました。十日には身の回りの持ち物、毛布や食料を準備して持てるだけ持って、兵舎に火をつけたので、退却の運びであろうと思った。六日間はずき続けた。

八月十五日、途中の駅で終戦を聞きました。日本はまだ負けておらないと言いながら、荷車に弾薬の積み込みを手伝い、また歩き続けました。到着の所は興安南省公主陵であった。公主陵で終戦を知りました。ソ連軍により、八月二十三日に武装解除をされました。その後整備をしながら豚や鶏を捕り、食料を作っていました。

その後、二カ月がたち、いよいよ部隊の集結が行われ、汽車に乗る準備をした。発車するにも石炭はなく、枕木を掻っ払い十字鍬にて割り、それを焚きながら走る。また、途中では給水をしたり、また走るのを繰り返しながら、約一カ月がかりで黒龍江に着いた。黒龍江の水の上を櫓に荷物を積んで渡り、ソ連領に入った。ブラゴエシチェンスク駅より汽車にて出発。目的地も

わからず十日間がかりでイルクーツク地区のチェレン
ホーボ市の収容所に到着した。

そこで時計と靴をソ連軍に取られた。ソ連のズツクの半長靴にかえられた。まだ未完成の所を我々で完成させ収容した。その後は外の作業である。私は材木を荷車に積む仕事であった。寒い日も仕事、零下三〇度でも積み込み作業をやらされた。食事は一食に黒パン三五〇グラムと飯は飯盒の蓋に一杯。スープは掛盒に一杯である。飯は日本の甘酒ぐらいの物である。それも燕麦であった。腹が減り体が耐えきれず、これでは体がもたないと思い炭坑の石炭掘りを希望した。許可をもらい坑内に入った。炭坑作業に対しては黒パンが別に四百グラム支給される。また、一二五パーセント以上の仕事をするとな飯が箸で食べられ、量が飯盒の六分目ぐらいである。そのため、体力が付いて十二時間労働をするようにした。

私たち四人のグループは歩哨に交渉して、自分の休暇の日、夜鉄条網を開けてもらい畑に馬鈴薯の残り物を掘りに行き、三十キロぐらい袋に詰めて持って帰り、

分らないように床下に埋める。掘ったときは飯盒でふかし、一番に歩哨にあげる。そのことを繰り返して体を守ってまいりました。それからダモイまで炭坑で十二時間労働を続けてきました。

昭和二十三年七月十九日に日本ヘダモイの命令があり、身の回りを支度して検査を受けてダモイを待つことにした。いよいよ汽車の乗車指示があり乗車し、出発した。約十日間かってナホトカ駅に到着し、その日は奉仕作業する。翌日ようやく「明優丸」に乗船し出発した。

昭和二十三年八月一日舞鶴港に上陸し、引揚者の宿舎に入所した。その日説明と引揚げ手続を済ませました。翌八月二日舞鶴の宿舎を出発し、蒲生郡武佐村大字友定二六〇番地に無事復員いたしました。また、日本の食事が変わったため、少しの間粥程度の食事で養生いたしました。復員後は農業に従事して現在まだ生産に努めております。武佐村も昭和三十三年に近江八幡市へ合併いたしました。

現在は近江八幡市友定町であります。近江八幡市民

として社会福祉のために民生委員、児童委員を五期務めさせていただき、現在は武佐学区社会福祉協議会の会長として勤めており、最近高齢者社会と地域社会を目指し、福祉活動にと貢献させていただいております。

追 想

滋賀県 向 井 辰 雄

近江八幡市大字古川字益田で大正五年二月一日に生まれる。桐原尋常高等小学校卒業。青年学校に学び、徴兵検査を受け甲種合格、近衛歩兵第三連隊に入隊。家業は農業。召集時の家族は父、母、妻、長女。

現役除隊後、一回目の召集は福知山二十連隊。二回目の召集は敦賀十九連隊、ここで独立歩兵大隊編制、千鳥列島に派遣さる。

終戦後一週間ごろ、ソ連軍上陸、武装解除さる。

八月十六日ごろ、各隊集合命令により大隊長より終戦の旨伝達さる。その時の命令により編成はそのまま、

各人の行動は軽挙妄動を戒むようにとあるが自爆する部隊、逃亡する者などあり。混乱の状況であった。

八月末ごろ、ソ連貨物船が入港し、全員内地に送還するとのことで部隊全員乗船、内地の方向に向かって出港。と喜びも束の間、夜間いつの間にか北に向かって航行、そのままシベリアに連行される。着いた所は港らしくもなく荒れ放題の所であった。そこから貨車に乗せられ、イルクーツクの第十一分所で元凶人のいた荒れ放題のひどい所で、南京虫やシラミがたくさんおり、眠れず大変だった。

収容人員は千人ぐらいて、給与も悪く、再三所持品の検査で持ち物はほとんど取られてしまい、着ている物だけになってしまった。

作業はほとんど鉄道建設で、昼夜の別なく交代でさせられ、厳寒時でも焚き火は禁じられ、零下三〇度以内なら必ず作業に出された。土が凍り作業ノルマが上からずヴィストラとせきたてられ、栄養失調者がたくさん出て、交互に病院などへ送られて行った。その後、収容所の入替えなどがあり、製材所や建物建築など